W-4-1

自他交替とヴォイスの相関についての類型論的考察

岡本　進

（東京外国語大学 susumu.okamoto415[at]gmail.com）

1.　はじめに

本発表の目的は、『語研論集』で調査された言語を、動詞の自他交替パタンとヴォイス (使役、再帰、受動) との形態 (統語) 的連続性によって分類し、通言語的に考察することである。結論として、分類された言語群には、地理的な偏りや類型論的な特徴があることを主張する。例えば、ヨーロッパの言語では非他動化と再帰が、ユーラシア大陸 (アルタイ諸言語と朝鮮語) の言語では非他動化と受動がそれぞれ連続し、自他両形の不安定動詞は地域にかかわらず、孤立型の言語で用いられる。

本発表の構成は以下の通りである。2 節で動詞の自他交替パタンとヴォイスについての先行研究をまとめる。3 節で『語研論集』のデータを用いて自他交替パタンとヴォイスの連続性を論じる。4 節は結論である。本発表中の例文のグロス・日本語訳は先行研究で使用されているものに倣う。

2.　先行研究

動詞の自他交替についての主要な類型論的研究として、Haspelmath (1993) や Nichols et al. (2004)、国立国語研究所 (2014) の『使役交替地図 (WATP)』などがある (表 1)。本発表では、表内の太枠で示すナロック・パルデシ・桐生 (2015) の術語を用いる。

表 1: 自他交替パタンの術語

ナロック・パルデシ・桐生 (2015: 2)		Haspelmath (1993), WATP	Nichols et al. (2004)[1]
他動化の対	例: 「うごく～うごかす」自動詞から他動詞を派生	causative	augmented
非他動化の対	例: 「わる～われる」他動詞から自動詞を派生	anticausative	reduced
中立（両極）対	例: 「なおる～なおす」自他ともに派生	equipollent	double derivation
不安定動詞	例: 「ひらく」自他両形	labile	ambitransitive
補充形	例: 「しぬ～ころす」語根を共有しない対	suppletive	suppletion

Haspelmath et al. (2014) は英語、日本語、マルタ語、ルーマニア語、ロシア語、スワヒリ語、トルコ語の 7 言語を対象に、(1) に提示する 20 の動詞の自他交替パタンを調査している。調査の結果、(1) の左側に挙げられている動詞ほど他動化されやすいことが明らかとなった (Haspelmath et al. 2014: 10)。その理由は、より左側の動詞の方が自発的に起こりやすく、右側の方が外的な要因によって起こりやすいためである (Haspelmath 1993: 105, Haspelmath et al. 2014: 10n)。

(1)　Haspelmath et al. (2014) の 20 の動詞対

boil, freeze, dry, wake up, go out/put out (fire), sink, melt, stop, turn, burn, fill, rise/raise, improve, rock, connect, gather, open, break, close, split

[1] Nichols et al. (2004) はこのほかに、ablaut, auxiliary change, conjugational change, adjective という類型を立てている。

本発表では自他交替パタンに加え、使役、再帰、受動の 3 つのヴォイスを扱う。というのも、使役は他動詞に、再帰と受動は自動詞にそれぞれ意味的に近接しており、形態的にも連続しうるからである (Zúñiga and Kittilä 2019: 17, 237-41)。例えば、3.2.1 節でみるように、ロシア語の再帰形式 *-sja/-s'* は再帰だけでなく、非他動化にも用いられる (Zúñiga and Kittilä 2019: 239)。本発表では、自他交替パタンとこれらのヴォイスとの形態 (統語) 連続性を通言語的に考察する。

3. 語研論集データに基づく調査

『語研論集』17 号およびその後刊行された補遺では、計 56 の言語の「ヴォイスとその周辺」が調査されている。そこでは open の自他対立 (「《風などで》ドアが開いた」/「(彼が) ドアを開けた」) が扱われている。これは Haspelmath et al. (2014) の序列 (1) においてかなり右側に位置し、WATP でも Haspelmath (1993) の 31 の動詞対のうち、5 番目に「自動化・反使役化しやすい対」となっている。『語研論集』ではヴォイスの例文として、使役[2] (「私は (自分の) 弟を立たせた」)、 再帰 (「私は (自分の) 体を洗った」)、受動 (「入口のドアが開けられた」) も扱われている。本発表は 56 言語の上記 4 つの例文を検証し、open の自他交替パタンがどのヴォイスと形態 (統語) 的に連続しているかに従って 5 つの型に分類した (表 2)。**不連続型**は、自他交替がどのヴォイスとも連続していない言語である。**使役型**は他動化と使役が連続している言語である。**再帰型**は非他動化が再帰と連続している言語、**受動型**は非他動化が受動と連続している言語である。**中動型**は非他動化が再帰とも受動とも連続している言語である。

以下では自他交替パタンとそれぞれのヴォイスの相関について詳述する。3.1 節で他動化、3.2 節で非他動化、3.3 節で中立 (両極) 対、3.4 節で不安定動詞をそれぞれ扱う。

表 2: 『語研論集』56 言語の open の自他交替パタンとヴォイスの連続性[3]

他動化 9 言語 / 16%	使役型	マレーシア語、ハルハ・モンゴル語
	不連続型	ウルドゥー語、ヒンディー語、日本語大阪方言、漢語諸暨 (しょき) 方言、漢語平江方言、漢語赤壁方言、トラパネク語
非他動化 30 言語 / 53%	再帰型	ロシア語、ポーランド語、ブルガリア語、リトアニア語、チェコ語、グイ語
		ドイツ語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ラトヴィア語
	受動型	朝鮮語、ホルチン・モンゴル語、ダグール語、トルコ語、キルギス語、サハ語、ウイグル語、トルクメン語、タタール語、ハカス語、ウズベク語
	中動型	ティディム・チン語
	不連続型	アラビア語、フィンランド語、トゥバ語、チュヴァシュ語、ソロン語、ナーナイ語、エスペラント
中立 (両極) 8 言語 / 14%	受動型	インドネシア語、フィジー語
	再帰型/使役型	ジョージア語
	受動型/使役型	ペルシア語
	不連続型	ビルマ語、タガログ語、ベンガル語、チナンテク語オスマシン方言
不安定動詞 9 言語 / 16%	不連続型	中国語、広東語、ヴェトナム語、クメール語、ラオ語、タイ語、パピアメント語、英語、イタリア語

[2] 『語研論集』では他動詞の使役 (「弟に歌を歌わせた」) も扱っているが、ここでは自動詞の使役のみを対象とする。

[3] 表中の百分率は小数点以下切り捨て。補充形は観察されなかった。WATP が対象としている 95 言語の open の対では、他動化 19.0%、非他動化 48.8%、中立 (両極) 13.1%、不安定動詞 18.0%、補充形 1.0%である。

3.1.　他動化

他動化、すなわち無標の自動詞から他動詞を派生するタイプは全体の 16%を占める。印欧語インド語群のウルドゥー語・ヒンディー語に加え、ハルハ・モンゴル語と日本語 (大阪方言) も他動化を用いる。これらの言語は verb-final という特徴を共有している。

このうち、他動化と使役が連続している使役型の言語として、ハルハ・モンゴル語とマレーシア語 (2) がある。ここでの「使役」は、Haspelmath (1993) や WATP のいう causative (表 1) とは異なり、「使役者が新しく A (他動詞主語) として導入され、元の S (自動詞主語) が O (目的語) として機能する文法的派生」を指す (Dixon and Aikhenvald 2000: 13)。

(2) マレーシア語 (野元 2012: 60、以下太字は発表者による)

a. *Dia*	***mem-buka(-kan)***[4]	*pintu*	b. *Saya*	***men-diri-kan***	*adik*	*di*	*atas*	*meja*
3SG	ACT-open-CAUS	door	1SG	ACT-stand-CAUS	younger.sibling	at	top	desk
「彼がドアを開けた」			「私は弟を机の上に立たせた」					

中国語は自他同形の不安定動詞 (3.4 節) である一方、諸暨方言は自動詞「开」に対し他動詞「开开」、平江方言と赤壁方言は他動詞「打开」である。これは漢語諸方言で、動詞連続構文が他動化のプロセスとして用いられているといえる[5]。

3.2.　非他動化

非他動化、すなわち無標の他動詞から自動詞を派生するタイプは全体の 53%を占め、再帰型 (3.2.1 節) と受動型 (3.2.2 節) に大別できる。再帰とも受動とも連続している中動型 (3.2.3 節) もある。

3.2.1.　再帰型

非他動化タイプのうち、11 言語が再帰と連続している再帰型である。主に印欧語がこのタイプである。ほかに、グイ語 (コエ・クワディ語族南西カラハリ・コエ語派) も非他動化と再帰が同じ形態論的プロセス (接尾辞 *-si*) で派生される。表 2 において破線で区切っている再帰型のうち、上部の言語は非他動化と再帰に人称変化のない再帰形式を、下部の言語は人称変化のある再帰形式を、それぞれ用いる。

印欧語のうち、バルト・スラブ諸語がこのタイプに含まれる。ブルガリア語は、再帰代名詞 *se* を非他動化にも再帰にも用いる (3)。

(3) ブルガリア語 (菅井 2012: 81, 83、ラテン文字転写し一部改変)

a. *Vratata*	***se***	*otvori*	b. *Izmih*	***se***	
door+the	REFL.ACC	open.AOR.3SG	wash.AOR.1SG	REFL.ACC	
「《風などで》ドアが開いた」			「私は (自分の) 体を洗った」		

ブルガリア語などのバルト・スラブ諸語の非他動化・再帰は、主語の人称にかかわらず同じ形式を用いるのに対し、ロマンス諸語やドイツ語 (4) は再帰型であるものの、再帰形式に人称の区別がある。

4　*mem-buka* のように、一部の動詞は接尾辞 *-kan* なしでも他動詞として機能する (野元 2012: 59)。

5　Aikhenvald (2006: 14-7) は Cause–effect SVC (serial verb construction) や Causative SVC と呼んでいる。

(4) ドイツ語 (成田 2022: 111, 115)

a. *Die* *Tür* *öffnete* ***sich***
the.F.SG.NOM door(F):SG.NOM open.PST:3SG REFL.ACC
「ドアが開いた」

b. *Ich* *wusch* ***mich***
I wash.PST:1SG REFL.1SG.ACC
「私は (自分の) 体を洗った」

ロシア語やリトアニア語などでは、再帰形式が動詞に付加される接辞として現れる。例えば、ロシア語では *-sja/-s'* が非他動化・再帰に用いられる (中岩・プロホロワ 2021: 137, 141)。

3.2.2. 受動型

非他動化が受動 (Zúñiga and Kittilä (2019: 84) のいう agentless passive も含む) と連続する受動型は 11 言語あり、モンゴル諸語とチュルク諸語、朝鮮語を含む。トルコ語では非他動化も受動も接尾辞 *-ıl* を含む (5)。受動の動作主は後置される *taraf-ı-ndan* (side-POSS.3SG-ABL) によって表される (奥 2019: 153)。

(5) トルコ語 (菅原 2012: 200、一部改変)

a. *Kapı* *aç-**ıl**-dı*
door open-PASS-PST
「《風などで》ドアが開いた」

b. *Giriş* *kapı-sı* *aç-**ıl**-dı*
entrance door-3SG.POSS open-PASS-PST
「入口のドアが開けられた」

3.2.3. 中動型

非他動化が受動とも再帰とも連続している中動型は、ティディム・チン語 (シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派) だけである。非他動化、受動、再帰、すべてに同じ接頭辞 *ki³-* が付加される[6] (6)。

(6) ティディム・チン語 (大塚・チンガイ 2022: 735-6, 742、一部改変)

a. *Koŋ²* ***ki³**-hoŋ²*
door MID-open
「ドアが開きました」

b. *Koŋ²* ***ki³**-hoŋ²* *ta:³*
door MID-open NSIT
「ドアが開けられました」

c. *Kei¹* ***ki³**-sil¹*
1SG MID-wash
「私は入浴する」

3.3. 中立（両極）

中立 (両極)、すなわち自動詞も他動詞も派生するタイプは全体の 14%を占め、オーストロネシア語族の言語を含む。このうち、フィジー語とインドネシア語[7]は受動型である。ただし、どちらの言語も動作主を明示的に表しづらい (Schütz 2014: 108, 佐近 2020: 254)。フィジー語では、自動詞は接頭辞 *ta-* によって、他動詞は接尾辞 *-va* によってそれぞれ派生され、前者は受動にも用いられる (7)。

(7) フィジー語 (岡本 2020: 319-20)

a. *Sā* ***ta**-dola* *na* *kātuba*
ASP SPON-open ART door
「(風などで) ドアが開いた」

b. *E* *dola-**va*** *na* *kātuba*
3SG open-TR ART door
「(彼が) ドアを開けた」

c. *Sā* ***ta**-dola* *na* *kātuba*
ASP SPON-open ART door
「(入り口の) ドアが開けられた」

---

6 (6)b の *ta:³* は「何らかの新しい事象が生起したことを表す」助詞である (大塚・チンガイ 2022: 736)。

7 マレーシア語は使役型である一方 (2)、インドネシア語の使役には迂言的手法が用いられる (佐近 2020: 256)。

ジョージア語は再帰型かつ使役型である。ジョージア語には動詞語根の直前に現れる母音 (pre-radical vowel) があり、ヴォイスに関わる意味機能を担う (Kojima 2012: 223-4)。非他動化は再帰と同じ母音 *i* を含む (8)a-b (ただし両者は格配列が異なる)。一方、他動化は使役と同じ母音 *a* を含む (8)c-d。

(8) ジョージア語 (児島 2022: 226-7, 229、一部改変)

a. *K'ar-i* *kar-it* *ga-**i**-ǧ-o*
door-NOM wind-INS PV-PRV-open-S3SG[AOR]
「ドアが風で開いた」

b. *Me* *t'an-i* *da-v-**i**-ban-e*
1SG.ERG body-NOM PV-S1-PRV-wash-AOR
「私は自分の体を洗った」

c. *Ma-n* *k'ar-i* *ga-**a**-ǧ-o*
3SG-ERG door-NOM PV-PRV-open-S3SG[AOR]
「彼がドアを開けた」

d. *Me* *ʒma* *da-v-**a**-q'en-e*
1SG.ERG brother.NOM PV-S1-PRV-stand-AOR
「私は弟を立たせた」

ペルシア語は受動型かつ使役型である。すなわち、非他動化プロセスは受動と同じ *šodan*「～となる」を含む複合動詞で表し、他動化プロセスは使役と同じ *kardan*「～する」を含む複合動詞で表すことができる (吉枝 2012: 220)。

3.4. 不安定動詞

不安定動詞、すなわち自他同形は全体の 16%を占め、東南アジア大陸部の言語とクレオールのパピアメント語、および英語が含まれる。イタリア語はロマンス諸語でありながら再帰型ではないという点で特異である。ただし、過去の事態であれば助動詞の選択が動詞の自他で異なる (久保 2021: 95)。

不安定動詞は孤立型の言語で多く観察される。これは孤立型の言語は形態論的手段を欠いているためである。それに加えて、不安定動詞は、自動詞にせよ他動詞にせよ、ほかのヴォイスと不連続である点も共通している。孤立型の言語は文法化していない語彙的要素をこれらのヴォイスに用いるためだと考えられる。例えば、タイ語では自動詞・他動詞ともに *pàət* という形態である。一方、受動 (9)a には「当たる」に由来する *thùuk* を、使役 (9)c には授与を表す動詞 *hây* (と「命じる」動詞) をそれぞれ用い、再帰 (9)b は *tua*「自分」を目的語にした他動詞文で表す。

(9) タイ語 (笠作 2021: 226, 228、一部改変)

a. *Pratuu* (*thaaŋ khâw*) *thùuk* *pàət*
door (path enter) PASS open
「(入り口の) ドアが開けられた」

b. *Chán* *láaŋ* *tua*
1SG wash self
「私は (自分の) 体を洗った」

c. *Chán* [*khɔ̌ɔ/bɔ̀ɔk/sàŋ/baŋkháp*] *hây* *nɔ́ɔŋ* *yɯɯn* *khûn*
1SG request/tell/order/force CAUS little brother/sister stand DIR.up
「私は (自分の) 弟を立たせた」

4. おわりに

自他交替パタンとヴォイスの相関について、ある程度地理的あるいは類型論的な偏りがあることが明らかとなった。非他動化のうち、再帰型はヨーロッパで、受動型はユーラシア大陸 (アルタイ諸言語と朝鮮語) で、それぞれ広く観察される。中立 (両極) はオーストロネシア語族の言語で多く見られる。不安定動詞は地域にかかわらず、孤立型の言語で用いられる自他交替パタンである。

今後の課題として、まず調査対象の言語を増やすことが挙げられる。特に新大陸とアフリカ大陸、太平洋地域の言語のデータが希少である。open だけでなくほかの動詞の自他交替パタンも含めて分析する必要がある。別の課題として、通時的考察がある。Haspelmath (1990) によれば、通時的に再帰の形式は逆使役 (すなわち本発表での非他動化) を経て受動へと、一方向的に収束する。これに従えば、再帰型は再帰から非他動化へ、受動型は非他動化から受動へと機能が移行しつつあると見ることができる。機能の意向が見られず、3 つの機能をカバーしている中動型は、現時点ではティディム・チン語だけである。再帰と他動化、受動と使役など、本発表で扱った以外の連続性も今後考察することも可能である。

グロス略号一覧（Leipzig Glossing Rules にないもののみ）

ACT	active	DIR	directional	POSS	possessive	S	subject
AOR	aorist	MID	middle	PRV	pre-radical vowel	SPON	spontaneous
ASP	aspect	NSIT	new situation	PV	preverbal prefix		

参考文献

Aikhenvald, A. Y. (2006) Serial verb constructions in typological perspective. In: A.Y. Aikhenvald and R.M.W. Dixon (eds.) *Serial Verb Constructions*: *A Cross-Linguistic Typology*, 1-68. Oxford: Oxford University Press. / Dixon, R. M. W. and A. Y. Aikhenvald (2000) Introduction. In: R. M. W. Dixon and A. Y. Aikhenvald (eds.) *Changing Valency: Case Studies in Transitivity*, 1-29. Cambridge: Cambridge University Press. / Haspelmath, M. (1990) The grammaticalization of passive morphology. *Studies in Language* 14(1), 25-72. / _____ (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternation. In: B. Comrie and M. Polinsky (eds.) *Causatives and Transitivity*, 87-120. Amsterdam: John Benjamins. / Haspelmath, M., A. Calude, M. Spagnol, H. Narrog, and E. Bamyaci (2014) Coding causal-noncausal verb alternations: A form-frequency correspondence explanation. *Journal of Linguistics* 50, 587-625. / 笠作記史 (2021)「タイ語のヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』26, 225-233. / Kojima, Y. (2012) Version and object marking in Georgian verbs. *Senri Ethnological Studies* 77, 221-235. / 児島康宏 (2022)「ジョージア語 (グルジア語): 特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定, 形容詞と連体修飾複文」」『語学研究所論集』27, 213-268. / 国立国語研究所 (2014)『使役交替言語地図』(https://watp.ninjal.ac.jp) (最終閲覧日 2023/10/12) / 久保博 (2021)「イタリア語のヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』26, 91-100. / 中岩諒・プロホロワ, マリア (2021)「ロシア語のヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』26 , 137-147. / 成田節 (2022)「ドイツ語のヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』27, 111-121. / ナロック, ハイコ・パルデシ, プラシャント・桐生和幸 (2015)「序論」パルデシ, プラシャント・桐生和幸・ナロック, ハイコ（編）『有対動詞の通言語的研究: 日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』1-21, 東京: くろしお出版. / Nichols, J., D. A. Peterson and J. Barnes (2004) Transitivizing and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8(2), 149-211. / 野元裕樹 (2012)「マレーシア語のヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』17, 55-72. / 岡本進 (2020)「ヴォイスとその周辺: フィジー語」『語学研究所論集』25, 319-324. / 奥真裕 (2019)「トルコ語の受動表現」『語学研究所論集』24, 153-156. / 大塚行誠・チンガイ, リャン (2022)「ティディム・チン語におけるヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』27, 733-752. / 佐近優太 (2020)「インドネシア語のヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』25, 253-264. / Schütz, A. J. (2014) *Fijian Reference Grammar*. Honolulu: Pacific Voices Press. / 菅原睦 (2012)「トルコ語」『語学研究所論集』17, 200-211. / 菅井健太 (2012)「ブルガリア語」『語学研究所論集』17, 81-88. / 吉枝聡子 (2012)「ペルシア語のヴォイス」『語学研究所論集』17, 220-228. / Zúñiga, F. and S. Kittilä (2019) *Grammatical Voice*. Cambridge: Cambridge University Press.